

序

今回のタイトルを「必ず診療に役立つスポーツ傷害の画像診断」としました。スポーツ診療にかかわる医師は、医療面接（問診）や診察（身体所見）である程度疾患は予測できますが、確定診断、鑑別診断、治療方針の決定や治療後の評価に画像診断は必要不可欠です。一方、MRIなど画像機器の進歩は目覚しく、診断技術も向上していますが、そのため医療面接や身体所見を十分とらずにMRIなどの結果のみで診断し、主病因の診断を誤ることがあります。

そこでこの度、本書「必ず診療に役立つスポーツ傷害の画像診断」では、実臨床で役立つようスポーツ傷害の画像診断におけるモダリティ別の特徴、特有の診断・画像撮影の基本と読影のポイントをまとめさせていただき、診断に際してのTIPSやPitfallなどに陥らないように執筆させていただきました。さらに治療方針の考え方と患者への上手な説明をコンパクトにまとめ日常診療で役立つ書となるよう編集しました。

第1章では画像診断の基本として、スポーツ傷害を画像診断する際の特徴や注意点について概説させていただきました。第2章では効果的な撮影法として、モダリティや撮影法の特徴、TIPS、Pitfallに陥らないための診断方法を取り上げました。第3章は、スポーツ傷害に関し、部位ごとに代表的疾患や見逃しやすい疾患について、疾患のポイント、画像の提示・画像所見のポイント、臨床所見、鑑別診断を簡潔に記載させていただき、さらに治療方針と患者への説明を加えることで実臨床でのハンドブックとなるようにしました。また、本書では「Q&A」を加えることで、知識の整理に加えより広い視野で疾患の診療の手助けになるようにしました。ただ、紙面の制約上、とりあげることのできなかった疾患がありますことを御容赦ください。

執筆は現在、臨床の最前線で活躍されています指導医の方々にお願いしました。

本書は整形外科医のみならずスポーツ診療に携わる医師やメディカルスタッフを含めた医療関係者すべてにも役立つものと考えています。さらに本書はスポーツにあまりかかわることの少ない先生にも診療の一助となり整形外科医（スポーツドクター）にコンサルトする際の手近な参考書として利用していただけるものと思います。

最後に執筆いただいた先生方には、ご多忙のなか決められた原稿構成にしたがって執筆していただいたため、大変ご苦労をお掛けしたと拝察致しております。本書にご執筆いただいた先生方にあらためまして深謝するとともに、本書籍が常に診療の傍らに置かれ読者の皆様方の臨床に即役立つことを祈念し序文の挨拶と致します。

2013年9月

宮崎大学医学部整形外科
帖佐悦男